最優秀賞　大学生部門〈思考力のある作品〉

蛸を噛みしめるように

東京大学大学院
李　貞善

人は、一生忘れられない感覚の記憶を紡ぎながら生きていく。その断片的な思い出という個々の糸は、堅牢な織物のように繋がり、いま・ここの私を支える。私にとって生き抜く力は、父から贈られた『生』の産物である。

十二年前、大学卒業後安定した会社に就職したものの、私は日本に留学して学問を追究したいという念願をずっと抱き続けていた。しかし、当時父は狭心症と癌を次々と診断され、数回の手術を受けざるを得なかった。人生の春、私は夢と現実の隙間に落ちていた。

それでも私は、働きながらも夢を諦めず希望を持ち続けた。幸いにも父は治療の甲斐があって癌から徐々に回復した。私も無事に一昨年、日本の文科省奨学生の最高齢者として選抜された。その話を聞いた父の顔には、一瞬哀しみが漂った。

それからある日、父は渡日直前の私のために自ら市場で材料を用意し、丹念に蛸炒めを作ってくれた。何だか、健康を取り戻した父の料理には、生と死の深淵から帰還した求道者の超然たる力がこもっていた。

固い蛸を懸命に噛みしめながら、ふと考えた。深海の底で漁師に抗い、最後まで奮闘したはずのこの蛸のように、十年前の父は、生と死の狭間で孤独な死闘を繰り広げたのであろう。父はきっと、自らの命を救ったのは医学の力のみならず、母の手作り料理と家族の愛であることを実感したに違いない。そんな思いに至った瞬間、心の底から熱い渦が巻き上がり、暫く蛸を飲み込むことができなかった。

長年の思いが叶い、日本に留学している現在、時々無性に父の蛸炒めが懐かしくなる。父の生命力と、蛸の強靭な粘りが凝縮されたあの手作り料理こそ、私にとって生の第二幕を切り拓く力である。煩悶に充ちた長い回り道の果てで出会ったあの感覚から生き抜く力を授かった私は、いま・ここで蛸を噛みしめるように、これからを紡いでいきたい。